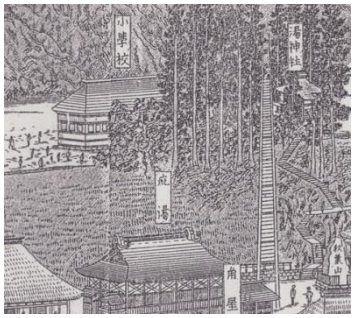
肘歴通信 第七號（ごう）

「明治～昭和初期の肘折小中学校」のこと

2009 年にその 134 年の歴史に幕を下し、2018 年には校舎も取り壊された肘折小中学校。その歴史をもう一度振り返りましょう。

・明治 7 年　亀屋半助氏の小屋を借りて教室開校

明治 7 年は大蔵村内で 4 つの学校が開校し、肘折は児童数 17 名。翌 8 年には沼の台を本校として肘折分教場になりました。


明治 30 年の絵図

～初の学校は今の傷湯（上の湯）の真上の丘に建てられた教室一つ、宿直室。先生は川部先生とかいう天童藩士で中々恐しい記憶が残る。時代として遊ぶには戦争ごっこが多く、特にすぐ前に当る今の薬師堂が主戦場でした。～（松井富治氏）

・明治 38 年　肘折尋常小学校として独立

現・肘折保育所の場所に移転。大蔵鉱山の発展と共に児童数が増加、明治 44 年の増築や仮教室を設置し、45 年には児童数 134 名。しかし大正 9 年には鉱山が一時閉山し、児童数が激減しました。

最古の学校写真　初代校長・有馬三生

～屋根はかや葺で玄関はお寺のような形、お客によく「お寺ですか？」と聞かれた事がありました。
当時の学用品は、本に石版と石筆で、鉛筆は三年以上でなくては持てなかった。一年から六年まで複式で、先生は一人、校長兼担任教師兼小使いでした。～（斉藤政吉氏）

増築記念スタンプ

～三学年の時、新しい校長として大場重次郎先生が赴任されたが、フロックコートを着て、靴のまま床板にあがって来た。私たちは驚き、ここは児童一同が毎日雑巾で拭き掃除しているのだ、と抗議したところ、靴も脱がずこれで良いのだ、と言われ納得できなかった想い出がある。大蔵鉱山の子弟は洋服、私達は半纏で通学した。鉱山からリボンをつけたおさげ髪に紫袴の美少女がおって、全校児童の憧れの的だった～　（柿崎寛氏）

～ただいまの三原安夫君（綿屋業）の家を一部借りて、一学級を綿屋学級と称し、教室の不足を補いました。同級生も部落の人は半分以下で、鉱山より来る生徒は金沢市出身が多くおったし、その人々に負けるな、と誓い合った。しかし、その人々は物資はほとんど新時代にあった物を持ち、無音の映写機を夜間鉱山に見せてもらいに行ったものです。～（柿崎伝八氏）

2 ページ目に続く

1ページから続き

・昭和７年　学用品の給与・学校給食の開始

昭和４年の世界恐慌により、貧困家庭の就学が困難になり始めると、救済処置として学用品の給与と学校給食(米弁当)を開始し、子供の修学を続けられるよう図ります。

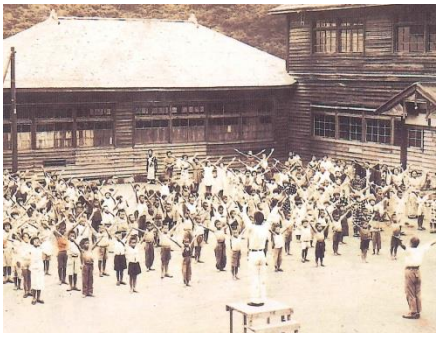
～昭和九年、大凶作に見舞われ、生徒の弁当は全部糧飯で大根の葉ご飯が普通でした。茨城県より学校への慰問にサツマイモが送られた一日だけ、弁当を持参せずサツマイモをおいしく食べた思い出があります。
四年生の頃、新しい校長の阿部与五郎先生に言葉使いをみっちり教育されたことを思い出します。当時はよそ様宅へ入る際の「ハエットー」、帰りの言葉「ンダーラマズ」と言い、学校で注意された。「ごめん下さい」「さようなら」と二つの言葉を使うよう教育され、また部落の方々も協力してくれまして、その後「ハエットー」「ンダーラマズ」を使う人はもう肘折衆でないとわかるようになったという事です。～（須藤彌太郎氏）

・昭和 12 年　日中戦争開戦、大蔵村第三尋常小学校へ改称

昭和 13 年には女子の華美な服装を自主規制、晴天に高下駄を履かないなど、日中～大東亜戦争の時世が、当時の肘折小中学校へも影響し始めました。
昭和 14 年、物資増産の国策の為、大根や白菜、茄子・芋を地域の耕作地に試作。高等科生徒は野兎狩りを実施しました。
ラジオの寄贈を受け、早起き体操会(ラジオ体操)を初実施。

湯坂の畑で大根収穫

～「明日は栄養料理をするから大根一本と味噌一椀を持ってくるように」と校長先生から言い渡される。
翌日、大きいのを一本と味噌一椀を持って、栄養料理に胸を膨らませて学校に行く。校長先生の奥さんと補修科の女生徒がいて、持ってきた味噌を決められたバケツにあける。
待ちに待った昼食時になると、味噌を入れてきたお椀に大根汁を盛ってもらい、ご飯のお菜にして食べる。たまにみがき鰊の１寸くらいのが入っていると箸でつまんで見せ合い、大騒ぎをしてフウフウ食べる。～　（中島弘氏）


ラジオ体操の様子

・昭和 16 年　大蔵村肘折国民学校へ改称

大東亜戦争末期、肘折の学校においても教育より勤労奉仕の面が多くなります。
アケビの蔓や、繊維の材料である葛や赤麻の採集、鉱山の選鉱、農地開拓。
そして昭和 20 年に終戦を迎えます。

・昭和 22 年　大蔵村立肘折小中学校へ改称

肘折に小さな「教室」が開校してから、「肘折小中学校」となるまで 73 年。まさに激動の時代を抜けてきました。残り 61 年は余白が無いので、次の機会にさせていただきます。

肘折歴史研究会